

時40

150

古文讀本
二の巻

古文讀本二の卷

大和田建樹選

○頼光朝臣(古今著聞集)

橘成季

成季ハ後深草天皇の時の人なり。諸道へ
まぐれたる人々此を以てまぐれをあつめり。
著聞集をあつめり。

頼光朝臣。寒夜ふと此へあつきて歸りける。頼
信の家ちうくよりたまは公時を使よて只今こ

古文讀本二の巻

大和田建樹選

○頼光朝臣(古今著聞集)

橘成季



成季ハ後深草天皇の時の人なり。諸道へ
めぐれたる人々此を以てしるをあつめり。

著聞集をあらはせり。

頼光朝臣。寒夜ふと此へあつきて歸りける。頼
信の家ちのくよりたまは。公時を使よて只今こ

そまのり過ぎはまき。此寒さあはるはるけき。美酒をべりやといひたりけき。頼信朝ら。さうふ酒のこてあうける時さうくれバ。興に入りて只今見んやうにや。結ぶづ。此仰さうやにようらさび思ひ結ひゆふ。浅渡りたるべ。といひくれバ。頼光すまはら入りにく。盃酌の間。頼光廐の方を見やうたうけき。童を一人いまめておあきうけり。あや一と見て。頼信に。あれよいま一めておきたるもれをたう。と問ひくれバ。鬼童丸さうとさうふ。頼光おさるあはる。いかう鬼童

丸をさうおまき。いふたいま一め置き給ひたうぞ。あまのり過ぎはまき。此寒さあはるはるけき。美酒をべりやといひたりけき。頼信朝ら。さうふ酒のこてあうける時さうくれバ。興に入りて只今見んやうにや。結ぶづ。此仰さうやにようらさび思ひ結ひゆふ。浅渡りたるべ。といひくれバ。頼光すまはら入りにく。盃酌の間。頼光廐の方を見やうたうけき。童を一人いまめておあきうけり。あや一と見て。頼信に。あれよいま一めておきたるもれをたう。と問ひくれバ。鬼童丸さうとさうふ。頼光おさるあはる。いかう鬼童丸をさうおまき。いふたいま一め置き給ひたうぞ。あまのり過ぎはまき。此寒さあはるはるけき。美酒をべりやといひたりけき。頼信朝ら。さうふ酒のこてあうける時さうくれバ。興に入りて只今見んやうにや。結ぶづ。此仰さうやにようらさび思ひ結ひゆふ。浅渡りたるべ。といひくれバ。頼光すまはら入りにく。盃酌の間。頼光廐の方を見やうたうけき。童を一人いまめておあきうけり。あや一と見て。頼信に。あれよいま一めておきたるもれをたう。と問ひくれバ。鬼童丸さうとさうふ。頼光おさるあはる。いかう鬼童

志げしむるほがら。鬼童丸究竟のまねふて。しり
ぬける縄かぬけらつてさつてのぐれ出でぬ。狐戸
より入りて頼光のわいるよの天井にあり。此天
井ひきはふちつて落ちかゝそれだ。勝負すゞきと
異儀あゝと思ひあつてほがらに頼光もたゞ
びびらあゝだ。はやくさうりにらる。落ちかゝ
それだ。大事と思ひて。天井にいゝらうと大き
に。てんようとさしちたあやうい。おやうそくきと
いひて。誰ういふとよびくれば。細名のうてまね
らる。明日ハ鞍馬ノまねるべし。いまは夜をこ

めてさきさうちがうてまねるんじきぞ。うれが
それだ。はきらうとさしちたあやうい。おやうそくきと
いひて。誰ういふとよびくれば。細名のうてまね
らる。明日ハ鞍馬ノまねるべし。いまは夜をこ
めてさきさうちがうてまねるんじきぞ。うれが
それだ。はきらうとさしちたあやうい。おやうそくきと
いひて。誰ういふとよびくれば。細名のうてまね
らる。明日ハ鞍馬ノまねるべし。いまは夜をこ
めてさきさうちがうてまねるんじきぞ。うれが
それだ。はきらうとさしちたあやうい。おやうそくきと
いひて。誰ういふとよびくれば。細名のうてまね
らる。明日ハ鞍馬ノまねるべし。いまは夜をこ

牛の飼ひ所なる野飼の

殺して。路次へひきよきて。牛の腹をうたやがりて。其中に入りて。目ばかり見出だして。まらけり。頼光あんのびとく来りけり。津衣に太刀をぶはきしりける。綱が時。貞光。季武等皆ともあけり。頼光馬をひらき。野のけき興あり。牛を殺す。四天王のごもが。我もくともひらて射けり。まらけり。興あり。見えける。其中に綱。いしが思ひらん。ごが。矢をぬきて。死したる牛にむらいて。らを引きたる。人あやと見るごも。

牛の腹のぼたをひらて。矢をはちらたる。腹乃肉より大の重。打刀をぬきて。走り出で。頼光よか。見れば。鬼童丸ちりけり。矢を射。くらき。ごが。事ともせ。敵ふ向ひり。頼光も。少。も。太刀をぬきて。鬼童丸の頭をうち。打刀をぬきて。く。は。ち。頭をむる。か。い。死ぬ。まで。たけ。い。語。入。た。る。ま。ら。け。り。頼光。それより。歸りにけ

り。

淨衣

讀方小注意すべし

○衣のたて (同ドク)

伊豫守源頼義朝臣。貞任宗任をせむる間。陸奥の國に十二年の春秋を送りけり。鎮守府をたもちて秋田の城よりつりけふに雪ふりていく片のを

のたごもみ鎧もまきふたへしけり。衣河乃館岸高く川ありければ。楯をいもがたて宵小かさねいづをくみて攻め戦ふ。貞任等たてびいてつひに城のよりるありのまき落ちたり。一男八幡太郎義家。衣川に追ひつてせめふとて。きたちもくさうらるを見ゆる。まののれまばひまののれを。物いばん。こいをれもけまば。貞任見らうたりたり。

衣のたてをほつるびまかり

こいけり。貞任くみまきやけり。まののれ

きふくむけて。

年をく一糸のこぼれのくる一はま

と付けたうけり。其時義家もげたる矢をたしと
づいて歸りにけり。ちばかりの戦ひの中におも
かりける事なり。

○飛雁つらさをやぢる(同どく)

同ト朝臣十二年の合戦の後宇治殿へあむりて

宇治殿
藤原頼通

匡房
大江匡房

我々の閒に物語やけるを。匡房卿よしく聞き
て。器量ハカリこた武者ちれども。猶いさきの道をた
きくぬ。独言よいさけるを。義家の郎等聞きて。
けやけきささ。戦の結ぶ人なれ。とおもひたり
り。ちるほやに江帥出でられけり。やがて義
家を出でける。郎等かゝる事をさうのこまひ
つき。語りけれ。ちびめてやうな。いひ
て。車にのりけれ。つらき。みちりて。やく
き。れり。やがて弟子にもりて。それより常に
まうで。學問をせり。其後永保の合戦の時。

江帥
太宰權帥
大江匡房

金澤の城をさめけるに。ついでに馬を飛ばして
新田の面をふりかきとまらるるが。にまのふ驚れ
つとをみづらて飛び歸りける。將軍あやこ
てくつばを裁かして。先年江帥の教へ給ひつ
る事あり。ぶぐん野に伏し時ハ飛馬つとをやぶ
る。此野ふのくび敵ふたる。かゝめ手を
まはるる。下知するれば。手裁まかちて
三方をまく時。あんのぶとく三百余騎をこく
おれたらる。兩陣ふだれあひて戦ふ事かぢる
ち。はまふとかねてはらる。め事るれば。將軍

のいへる勝つた。兼て武衛等が軍やまきたけ
り。江帥の一言をのこす。あはれ。あはれ。あはれ。
とがいはまらる。十二年の合戦ふ。貞任とらたま
に。宗任を降人よちりて。東よるま。ゆる
てつと。い。嫡男義家朝臣の。に朝夕伺候
さ。あ。日義家朝臣。宗任一人。て。た
行きたる。主従共に狩装束にて。つがをた
家。つ。野を過ぐ。狐一匹。走りける。義
家。射殺せん。と思ひて。左右の耳

○桓武天皇（水鏡）

内大臣中山忠親公

公ハ後鳥羽天皇の建久六年ノ薨ぎしる。水鏡ハ神武天皇より仁明天皇までの事を聞き傳へたる體ニ記さるる也。

次のみろが桓武天皇とナリ。光仁天皇の清子。母贈正一位乙繼のむすめ。皇太夫人高野新笠也。寶龜四年正月十四日東宮に立ち給ふ。徳年

三十七。そのほのひのひ。百川が力をしきまのり。光仁天皇の清子のまかりナリ。はるぬ。天應元年四月廿五日位。即き給ふ。清年四十八。まをさしたまふ。廿四年も。中略。延暦三年五月七日。のろ三萬が。あし。三町。難波より天王寺ノリ。に。都。の。廿六日に。山城の長岡小京たり。六月に長岡の京に

宮づくりをばめらせ給ふ。諸國の正税六十八萬束を大臣以下參議已上に給ひて。長岡の京に家をつくらしめ給ふ(中略)十一日戊申。長岡の京にうつり給ふ。同づれ四年七月中廿十日ごろに。傳教大師ひえの山にのびまき給ひ給ひはげめ給ひき。生年十九にげり給ひ。八月小奈良の京へ行幸給ふ。長岡ふりけり。に。た。齋宮のちが。奈良におは。か。伊勢へく。長岡の京に中納言種繼留守にて候ひ

一。或。み。の。早良親王。東宮とておは。人をつ。て射。め給ひ。た。事。の。常。に。行幸。給ひ。て。天應二年に佐伯今毛人といひ人を宰相も。せ給ひ。た。を。み。か。の。せ給ひ。た。に。種繼。佐伯の氏のか。る。い。ま。給ひ。た。に。し。か。ば。宰相。を。三。位。を。せ給ひ。て。東宮。に。種繼。を。た。は。ん

す。同じく十二年に。いまの京の宮城をしくり踏ひ
き。同じく十二年十二月廿二日辛酉。長岡の京より
いまの京よりしくり踏ひて。加茂のやうらに行幸あり
き。同じく十二年に。みまの東寺をしくり踏ひて。し
又藤原伊勢人といひし人。貴船の明神の位に。い
て。鞍馬寺をだしくり踏ひて。同じく十七年
勅使を淡路の國へ遣はして。早良親王の骨をむ
らうまつて。大和の國八島のみまの宮に。たぶらめ踏ひ
き。この親王なるが。いづれこのまの御中。いづれま
もて人もかく死す。うせ。いづれまの宮に。たぶらめ踏ひ

て。いづれまの宮に。二度まで入をたてまつり踏ひ。皆うみ
に入り波うたぶら。いづれ命をうたてまつり踏ひ。二度
親王の甥の宰相五百枝を。いづれまの宮に。たぶらめ踏
ひて。いづれまの宮に。いづれまの宮に。たぶらめ踏
月二日。田村將軍を。いづれまの宮に。たぶらめ踏
が家。いづれまの宮に。いづれまの宮に。たぶらめ踏
月己未の日。いづれまの宮に。いづれまの宮に。たぶらめ踏
早良親王。いづれまの宮に。いづれまの宮に。たぶらめ踏
内親王を皇太后。いづれまの宮に。いづれまの宮に。たぶらめ踏
ま。いづれまの宮に。いづれまの宮に。たぶらめ踏

をたゞしめしむるにけり。けるにころりたるめ
き。(中略)同トた廿三年又月十二日。弘法大師生年三
十一とヤリ。に唐ノしり。七月。傳教大
師なるべく唐ノしり。同ト廿四年六月
。傳教大師をる。天台の法
支らる。ひろまる。

○平城天皇 (同トく)

次のみまが平城天皇とヤリ。桓武天皇の法子。
母内大臣藤原良継のむすめ。皇后おとむる。延
暦元年十一月廿又日に東宮に立ち。同ト廿
二年。早良親王の。同ト廿六年五月
に。大同年五月廿八日に位。即
ち。同ト廿二年。同ト廿四年。同
ト廿六年。同ト廿八年。同ト
廿九年。同ト三十一年。同ト
三十二年。同ト三十四年。同
ト三十六年。同ト三十八年。同
ト四十年。同ト四十二年。同
ト四十四年。同ト四十六年。同
ト四十八年。同ト五十年。同
ト五十二年。同ト五十四年。同
ト五十六年。同ト五十八年。同
ト六十年。同ト六十二年。同
ト六十四年。同ト六十六年。同
ト六十八年。同ト七十年。同
ト七十二年。同ト七十四年。同
ト七十六年。同ト七十八年。同
ト八十年。同ト八十二年。同
ト八十四年。同ト八十六年。同
ト八十八年。同ト九十年。同
ト九十二年。同ト九十四年。同
ト九十六年。同ト九十八年。同
ト一千年。

諸國のいんばをめぐりあつて東國へいり給ひぬと。みよがたにやーかた。大納言田村磨宰相綿磨をいひよて。そよみもまはらうて。仲成をいひよてた。太上天皇の遣方のいんばにげりせよーらば。太上天皇すぢちよてのいんば給ひて。ほぐーたうーて人遣を給ひてた。治承二年二十七年。肉付のいんばをいひ命をいひちよてた。おぢらーかたー人の心ちり。太上天皇の遣子に東宮をすてまうて。みよがたのほなをいひ大伴親王をて。淳和天皇のおはすーまーを東宮にたてやさせ

給ひぬすて太上天皇の遣方の人づゝをいひぬと。ちかうのうた。同いよ二年正月七日。ほぐーて青馬を待らうた。廿三日に豊樂院へ出で給ひて。らあをいひて。親王以下いさせたるまのらせ給ひよ。みよがたのほなをいひの葛井親王のまをいひぬと。おはすーて。らひ給ふらしたるにたがらよ。らばをいひたがたをいひて。親王をたたらよ。ら矢をいひ給ふてた人ちり。い給へとの給ハせーに親王おはすーを射給ひよ。よのつ矢。い給ひて。生年十二歳とせ

たぶびやうを見えはるるまゝなり。(中略)同(略)
四年。冬。嗣やまきさるる。南園堂を建て
給ひた。その時藤氏の人を三四人おはせ
しをちがはれて。氏を願ふてたて給ふる
しる。まゝにそはし。こゝえはるる。神
武天皇よりのち。みろのほろしる。代々お
まひまゝ。子孫あいつぎて。あひまぐ。かく
おはする。その藤氏ころ。おまひめ。 (中略) 五
月八日。皇子たち源といふ姓をたまり。給ひま。 (中略)
同(略)十四年。みろ位をたまり。東宮にい

づいたてまつりて。やがてそのはるの治部卿親
王恒世を東宮にもて。ヤト給ひ。親王あれが
ちたのぢれ。ヤト給ひて。ころなり。なてはづ。ついで
たかよ。給はざりし。仁明天皇の親王
にて。おま。東宮ふたて。ヤト給ひま。位
を。東宮にて。おま。のぢり。あて。ゆ
づ。おま。給ひめ。おま。おま。おま。おま。
おま。おま。おま。おま。おま。おま。おま。
おま。おま。おま。おま。おま。おま。おま。

青馬をよみ 正月七日の儀式

豊樂院 讀方に注まざる

○浦々花をよみ(榮花物語)

作者不明

榮花物語は、宇多天皇より、堀河天皇までのこと
いふべき中に、御堂関白道長の榮花の
物語をよみしをよみしは、いふに、

内大臣
藤原伊周
中納言
伊周の弟隆
家

長徳二年内大臣藤原伊周兄弟をよみ
あつて左遷せしむる時の物語なり。

かゝて祭をよみしの中に、いひしは、
るる花をよみしは、いふに、
て、おほく、内大臣のとも中納言
のとも、殿に、おほく、
ふん、おほく、おほく、
おほく、おほく、おほく、
おほく、おほく、おほく、
おほく、おほく、おほく、

になりて流しつゝのまゝ中納言をば出雲権
守になりて流しつゝのまゝの事をもよひて
まゝに宮の内の上へ。いふ事をもよひて
有様。いふまゝもよひ人もあつてにたり。檢非違使
のまゝもよひのまゝもよひ。あつてにたり。い
ひまゝもよひのまゝもよひ。いふまゝもよひ。い
門もよひのまゝもよひ。いふまゝもよひ。い
まゝもよひのまゝもよひ。いふまゝもよひ。い
まゝもよひのまゝもよひ。いふまゝもよひ。い
まゝもよひのまゝもよひ。いふまゝもよひ。い

人もよひのまゝもよひ。いふまゝもよひ。い
まゝもよひのまゝもよひ。いふまゝもよひ。い
まゝもよひのまゝもよひ。いふまゝもよひ。い
まゝもよひのまゝもよひ。いふまゝもよひ。い
まゝもよひのまゝもよひ。いふまゝもよひ。い
まゝもよひのまゝもよひ。いふまゝもよひ。い
まゝもよひのまゝもよひ。いふまゝもよひ。い
まゝもよひのまゝもよひ。いふまゝもよひ。い
まゝもよひのまゝもよひ。いふまゝもよひ。い
まゝもよひのまゝもよひ。いふまゝもよひ。い
まゝもよひのまゝもよひ。いふまゝもよひ。い

やちせ結ふまゝのうらなひにちかき結ぶかき人
とくもあけぬれば。明順のあたまをまじりあはれ
り。

くさむね 昔のあはれに結ぶあはれに
くさむね

○なむ川 (回へ)

かゝるころのうらなひにちかき結ぶかき人
とくもあけぬれば。明順のあたまをまじりあはれ
り。

ふたつ道はなはるかに。辰のうらなひにちかき
かゝるころのうらなひにちかき結ぶかき人
とくもあけぬれば。明順のあたまをまじりあはれ
り。

くはなうせ給ひぬるまゝ。いづれ肉よ
如院より色いみづくまゝ。いづれおがれ。

長恨歌

白氏長安集より詩

○その五 (同トク)

帥殿ハ其日の肉ヲ。山崎せむせむはるんとしふ郎
ふづこいまる路へ。いづれはむせむと。いづれはむせむと。

檢非違使ごの四人づつ。いづれはむせむと。いづれはむせむと。
みこのいづれごも。いづれはむせむと。いづれはむせむと。
きよいづれごも。いづれはむせむと。いづれはむせむと。
安といふ人も。いづれはむせむと。いづれはむせむと。
非違使づつ。いづれはむせむと。いづれはむせむと。
とつたもせむせむ。いづれはむせむと。いづれはむせむと。
あゝいづれごも。いづれはむせむと。いづれはむせむと。
帥とみだう心地。いづれはむせむと。いづれはむせむと。
の方とや。いづれはむせむと。いづれはむせむと。
奏せむせむ。いづれはむせむと。いづれはむせむと。

はつちやうにくさびぐさなり。なるびよはく北の
方研カみすこやうにあげまれと。宣旨あるに。中納言。
宮の成有様とおぼしやう。かみまゝ北の方をも
おぼしやうせ給ふ。いみじうて。女院も内をも
るりぬる成有様をいみじうおぼし。大
殿もまゝの事より。いづるべくも。院もせらんに
させ給ひて。帥殿ハ播磨に。中納言ハ但馬に。ご
まり給ふべき宣旨なり。ぬ。こ。事。を。宮。を。つ。の
う。せ。給。ひ。て。さ。み。じ。う。き。し。と。い。は。ら。う。た
ま。い。ぬ。さ。し。ら。ぬ。あ。い。ま。に。さ。し。ら。ぬ。事。を。い。ひ。

ちりやう。せら戸の院よて播磨ふと。まう給ふ
べし。ぬ。さ。し。ら。ぬ。事。を。い。ひ。ぬ。さ。し。ら。ぬ。事。を。い。ひ。
て。母。を。さ。し。ら。ぬ。事。を。い。ひ。ぬ。さ。し。ら。ぬ。事。を。い。ひ。
さ。し。ら。ぬ。事。を。い。ひ。ぬ。さ。し。ら。ぬ。事。を。い。ひ。
う。給。り。ぬ。さ。し。ら。ぬ。事。を。い。ひ。ぬ。さ。し。ら。ぬ。事。を。い。ひ。
の。さ。し。ら。ぬ。事。を。い。ひ。ぬ。さ。し。ら。ぬ。事。を。い。ひ。
え。ぬ。さ。し。ら。ぬ。事。を。い。ひ。ぬ。さ。し。ら。ぬ。事。を。い。ひ。
ま。い。ぬ。さ。し。ら。ぬ。事。を。い。ひ。ぬ。さ。し。ら。ぬ。事。を。い。ひ。
を。い。ぬ。さ。し。ら。ぬ。事。を。い。ひ。ぬ。さ。し。ら。ぬ。事。を。い。ひ。
帥殿ハ播磨ふおはひと。さ。し。ら。ぬ。事。を。い。ひ。ぬ。さ。し。ら。ぬ。事。を。い。ひ。
(中略)

まじりたるをさしこぢりしをさしこむるは
一にせむまじりたるをさしこむるは
まじりたるをさしこむるは
まじりたるをさしこむるは
まじりたるをさしこむるは
まじりたるをさしこむるは
まじりたるをさしこむるは
まじりたるをさしこむるは
まじりたるをさしこむるは
まじりたるをさしこむるは

○おふちけの世繼 (大鏡)

作者 〰〰〰

作者をせにハ藤原為業といひ傳へたるを
たしつゝもいづゝの説あり。為業ハ崇徳天皇の
后時皇太后宮大進とれり。のち大原山
隠遁して名を寂念といひたる人なり。其の書
を文徳天皇より後一條天皇までの事を
るせむまじりたるをさしこむるは
まじりたるをさしこむるは

とも。いふ。こと。は。な。ら。ず。今。は。入。道。殿。下
 の。は。あ。し。の。ま。ま。に。お。し。や。れ。と。い。は。れ。ま。す。
 道。俗。男。女。の。清。新。ぶ。て。や。し。と。思。ふ。が。こ。の。事
 ち。か。く。も。し。て。は。ま。し。め。ま。し。る。后。ま。し。る。大。臣。公。卿
 の。清。く。し。き。こ。し。し。て。お。し。や。れ。と。い。は。れ。ま。す。
 人。に。お。し。や。れ。と。い。は。れ。ま。す。あ。の。清。く。し。き。こ。し。し。て。お。し。や。れ。と。い
 は。れ。ま。す。お。し。や。れ。と。い。は。れ。ま。す。中。の。事。の。う。し。し。し。て。お。し。や
 は。れ。ま。す。お。し。や。れ。と。い。は。れ。ま。す。法。華。經。一。部
 を。讀。ま。し。て。お。し。や。れ。と。い。は。れ。ま。す。ま。が。餘。經。を。ば。お。し。や。れ。と。い
 は。れ。ま。す。お。し。や。れ。と。い。は。れ。ま。す。五。時。教。と。い。は。れ。ま。す。

入。道。殿。乃。は。あ。し。の。ま。ま。に。お。し。や。れ。と。い
 は。れ。ま。す。お。し。や。れ。と。い。は。れ。ま。す。餘。經。の。う。し。し。し。て。お。し。や
 り。ま。す。お。し。や。れ。と。い。は。れ。ま。す。ま。が。餘。經。を。ば。お。し。や。れ。と。い
 は。れ。ま。す。お。し。や。れ。と。い。は。れ。ま。す。五。時。教。と。い。は。れ。ま。す。

せ。の。中。の。攝。政。關。白。と。す。大。臣。公。卿。と。き。き。し。ら。る。
 い。に。一。へ。今。の。ま。ま。に。入。道。殿。の。清。く。し。き。こ。し。し。て。お。し。や
 り。ま。す。お。し。や。れ。と。い。は。れ。ま。す。ま。が。餘。經。を。ば。お。し。や。れ。と。い
 は。れ。ま。す。お。し。や。れ。と。い。は。れ。ま。す。五。時。教。と。い。は。れ。ま。す。

よて。九月十日菊花をほらんどけるついでふま
だ京におはしませし時。九月のふよひ内裏に
菊の宴ありしふ。このおやぶつとてあたまひ
く。詩をみよむ。うさくかんど結ひて。衣た
まはり結つり。を。筑紫にもてく。とてあたま
まられば。ほらんびく。い。やぶ。そ。を。う。あ。り
め。い。で。つ。と。せ。結。ひ。ら。る。

去年今夜侍清凉 秋思詩篇独斷腸

恩賜御衣今在此 捧持毎日拜餘香

この詩いとみろく人くかんどやされま。これ

事どもたごちりぐちるにをあるび。筑紫に
てつりあはめさせ結つりけるを。あ。あ。つ。め
一巻とせしめ結ひて。後葉となづけけらき。つ。又
を。り。の。歌。り。さ。お。う。せ。結。つ。り。ける。哉。お。の。づ。の
ら。ぎ。ち。り。ち。る。え。ち。り。世。縁。が。の。う。け。り
時。これ。事。の。せ。め。て。あ。は。ま。よ。か。る。く。け。り
を。大。学。の。衆。ご。も。の。ま。ま。ふ。づ。に。を。い。ま。い。づ。り
し。を。さ。い。た。づ。の。た。ら。ひ。さ。う。て。け。る。ぶ。あ。ま。ぶ
く。ら。あ。り。ご。や。う。の。も。れ。て。う。ち。づ。こ。ま
う。つ。習。い。さ。う。て。け。り。老。の。け。の。は。な

古文讀本 二の巻

とびする 定まり

たる動詞のうりうりに用ふる

詞

古文讀本二の巻終

明治三十二年五月二十日印刷
明治三十二年五月廿四日發行

二卷 定價金廿五錢

選者 大和田建樹

發行兼印刷者 大橋新太郎

日本橋區本町三丁目八番地

版權所有

東京日本橋區本町三丁目

發兌元 博文館

